

第1回 沼津港の将来を考える有識者会議 議事概要

日 時：平成26年11月26日（水）午前10時00分～午後12時00分

場 所：若山牧水記念館

出席者：

（委員）

公益社団法人沼津牧水会理事長 林 茂樹

一般財団法人みなと総合研究財団顧問 大村 哲夫

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授 齋藤 潮

東京女子大学現代教養学部国際社会学科教授 竹内 健蔵

（行政代表）

静岡県副知事 難波 喬司

沼津市産業振興部長 高橋 強

事務局：静岡県交通基盤部港湾局港湾企画課

配布資料：

- ・次第
 - ・委員名簿
 - ・座席表
 - ・有識者会議設置要項
 - ・沼津港の将来像について（諮問）
 - ・沼津港の将来を考える有識者会議（説明資料）
 - ・沼津港の将来を考える有識者会議（参考資料編）
-

1. 挨拶（難波副知事）

- ・ 具体的な整備計画の前にしっかりと基本理念の方向性を定めた上で今後の沼津港のあるべき将来像を考えていただきたい。

2. 委員紹介

- ・ 委員の4名を順次紹介。

3. 会長の選任

- ・ 林委員の推薦により大村委員を会長に選出。

4. 会長挨拶

(大村会長挨拶)

- ・ 基本理念を決めるという責務に対してできる限り職務を全うさせていただく。
- ・ 素晴らしい景観に包まれた沼津港をどのように発展させていくのかが大きな課題であり、委員のみなさまの意見を承りたいのでよろしくお願ひしたい。

5. 諮問

- ・ 知事から有識者会議会長への諮問。(難波副知事代読)

6. 審議事項(沼津港の将来像の基本理念・方針)

①「これまでの経緯」、「会議の目的」について

- ・ 「沼津港の将来を考える有識者会議(説明資料)」P.2~5を説明(事務局)。

(大村)

- ・ 「住んでよし、訪れてよし」というキーワードは市民の方々に定着しているのか。

(事務局)

- ・ 県の基本方針である。

(林)

- ・ 未着手事業の課題をもう少し詳しく説明してもらいたい。

(事務局)

- ・ 旅客船ターミナルの場所や、プレジャーボートの内港での取扱等、内港利用の扱いがまとまらなかった。

(難波)

- ・ 船が行き交う使い方とするか、レジャー施設的に整備するかという意見に分かれた。

(林)

- ・ 伊豆の西海岸の地域と沼津港とは昔から定期航路によって深くつながっていたが、それがなくなり、関係性が希薄になってしまったように感じる。少なからず沼津の街の賑わいに寄与していたので、今後の協議の中で議論できたらと思う。

(大村)

- ・ 資料に「思いが異なる統一感に欠けた将来」とあるが、どういうことか。

(事務局)

- ・ 沼津港を通して地域を活性化させていこうという思いは同じなのだが、港湾管理者や民間の方々、それぞれの観点や手法が異なるので、意見がまとまらなかったということ。

(竹内)

- ・ H14年の「沼津港港湾振興ビジョン」の策定の際には、意見の相違なく策定できたのか。

(事務局)

- ・ 現在のようにびゅうおやINOのような施設整備が進んでいない当時の計画段階では意見の相違もなく、合意のもと事業を進めてきた。観光客も増え、徐々に状況も変わり、現段階で未実施の部分については意見が分かれることとなった。

(難波)

- ・ 段々事業が進んでいく中で、集客力が生まれ、いろいろな意見が出てくるようになった。

(林)

- ・ 休日にもなると駐車場が足りないぐらい大変な賑わいとなっているが、その賑わいが点になってしまっている。車で沼津港まで来て、食事・土産を買って帰ってしまう。周遊性が乏しいので、沼津の街の賑わいを考える上で問題となる部分である。沼津駅から20分なので駅とのつながり、蛇松緑道についてもっと考えていきたい。

(齋藤)

- ・ 沼津港の将来とはどの範囲までのことを考えていけば良いのか。臨港地区なのか、周辺まで含む範囲か。

(事務局)

- ・ 臨港地区を中心とした、これまでの事業範囲を想定している。

②沼津港の魅力について

- ・ 「沼津港の将来を考える有識者会議（説明資料）」P.6～26を説明（事務局）

(大村)

- ・ 沼津港の入込客数が145万人というのはなかなかすごい数字であるがあるが、どのようなカウント方法だったのか。

(沼津市)

- ・ 定期的に沼津市で行っている調査により沼津港にこられた方を推計した数。2、3日の調査からの推計。

(齋藤)

- ・ 沼津へ来られる方の約80万人が宿泊されるとのことだが、これの内訳はビジネスなのか観光なのかはわかるのか。

(事務局)

- ・ 愛鷹山のふもとの工業地帯等へのビジネス客が多く、駅前のビジネスホテルを利用して

いる。しかしこの統計は観光の統計であるのでビジネス目的はあまり入っていないと考えられる。詳細は確認する。

(林)

- ・ 沼津や西伊豆も便が良くなったので、日帰りが多くなった。昔は西伊豆の方に行くのは船で行くのが一番だった。そういった面でも、沼津港のこれからの役割を考えていくべきである。

(大村)

- ・ 日帰りバスツアーで沼津港での昼食をしているようだが全体の流れはどのような内容なのか。

(事務局)

- ・ 例えば伊豆長岡でのイチゴ狩りや柿田川の湧水などと組み合わせて、昼食時に沼津港に寄る行程になっている。(P. 24 を参照)

(大村)

- ・ 港湾クルーズはどのようなものなのか。食事は出すのか。

(事務局)

- ・ 湾内（沼津港～静浦・内浦間）を回る遊覧船（1時間程度）がある。食事は出さない。

(竹内)

- ・ 観光動向のデータを見ると沼津港は調子が出てきているように見えるが、実際は沼津市内の他の観光客をとってしまっているだけかもしれない。また、伊豆地域の内容を細かく見て、どの地域と連携すると効果的かを読み取ることも大事である。

(大村)

- ・ 前回訪れたとき関西の大型バスが見られたが、関西方面からの観光客の周遊はどのようなコースなのか。

(事務局)

- ・ 富士山や伊豆半島全体の観光が主であると考えられる。

(竹内)

- ・ 基本的に沼津港に来る観光客の目的は食事や買い物であり、歴史や文化をどのように売り出していくのが課題となってくるだろう。

③沼津港の進むべき方向性、将来像について

- ・ 「沼津港の将来を考える有識者会議（説明資料）」P. 27～32 を説明（事務局）。

（齋藤）

- ・ 方向性や将来像の言葉があいまいな表現であることに対し疑問をもつ。

（竹内）

- ・ あいまいな表現であるがゆえにどの港でも言えるような表現になってしまっている。「沼津港だから」というものが見えてこない。

（林）

- ・ たしかに「沼津港だから」というものが見えてこない。

（難波）

- ・ 本当はもっと回を重ねて議論すべきことだが、今回は事務局で案を作成させていただいた。どんどん意見をいただければと思う。

（大村）

- ・ 資料で言う沼津港の「強み」をもっと掘り下げる必要がある。駿河湾と富士山の眺望、千本松原の景観などを整理していけばいいと思う。

（林）

- ・ 港は千本松原の起点である。千本浜（海拔 0m）から富士山（3776m）を望める。富士山、愛鷹山、千本松原、海という富士山を望む線的な流れがあるので、これをどのように周遊に繋げるかが重要である。線的、面的に動線を作っていただきたい。

（難波）

- ・ 港から富士山を望む視点場が少なく、千本松原と港がつながっていることや船からの美しい景観を知っている観光客も少ない。千本浜の景観などに意識を向けてもらうことがなかなか出来ていないところが弱みである。

（大村）

- ・ 内港を渡ることができる「びゅうお」があるということは、沼津港の特徴である。全国的にも珍しく、既に周遊するルートが整っているということである。

(難波)

- ・ 現在は、食事をするところからそこまで歩いてみたいと思われない環境である。

(齋藤)

- ・ 防潮堤や荒々しい雰囲気の外港を見るとなかなか歩いてみたいと思わない。しかし、防潮堤は必要なものであるし、外港を含めて、内港と千本松原をつなぐ工夫をしなければいけない。

(林)

- ・ 外港の鉄くずは景観を阻害しているように思う。外港も何とかしないといけない。

(大村)

- ・ 人が通らないので綺麗にしない。人間と同じで、人に見られることを意識するとだんだん綺麗になるものだ。

(竹内)

- ・ 脅威は社会的背景にある少子高齢社会にもある。10年間程度のスパンでは問題はないかもしれないが、20年、30年後にはバスツアーで来ている団塊の世代のシニア層がいなくなる。今の若者は、海水浴や海洋レジャーも含み、海から遠ざかっている状況にあるので、同じような伸びは期待できない。また、「世界遺産登録」や「三大〇〇認定」など、登録されたことに満足してしまうのは危険である。世界遺産には各地が続々と選ばれているが、ライバルが多くいるということで、その中で「沼津らしさ」で勝負し、お客さんをとってくるという考え方を必要がある。

(難波)

- ・ 地域振興を進めるにあたって誰を対象にするのかというところが検討されていないので、そこは検討する必要がある。また世界認定や登録については意見のとおり危機感をもっている。

(竹内)

- ・ 沼津港の方向性の中で「観光客」を対象にという「観光客」の意味合いが少し広すぎる。何回目の人に対するのか、海外の人も考えるのかで戦略は変わってくる。

(難波)

- ・ 個人的な考えでは月に一度ぐらい訪れる方をターゲットとして狙っていきたいが、そういった考えではない方もいる。この会議の中で方向性を出したい。

(齋藤)

- ・ いかにかに滞在に耐えうる街にするかが重要。前回訪れた時に地元の方に干物をいつもどこで買うかと尋ねたらスーパーと答えていた。観光客が地元の人が食べる沼津のうまいものを街中のスーパーで買って、宿泊してもらって、沼津を拠点にして動いてもらうようなことができればそれが一番自然であるようにも思う。

(難波)

- ・ 観光客は、沼津港に食事や買物を目的に来ていることも事実で、このままでいいのかという懸念もある。しかし、将来をいい形に持っていくにあたってはスタートでは短期的な客層も必要であると思う。長期的には、内港の水面はまだ手がつけられるので、背後の食堂街の猥雑とした空間と、高質な水面の対比を考えるとおもしろい空間が生まれ、短期と長期をつないでいけるのではないかと。

(大村)

- ・ **港**の観光開発の方向性は、水族館かフィッシャーマンズワーフ等同じ傾向になってしまいがち。何かにかこだわった沼津らしい空間づくりが必要である。

(齋藤)

- ・ 沼津の日常とは何なのかを考える。派手な遊覧船等、観光客向けに内港を整理していくと何か嘘臭く見えてくる。漁船に使われている港そのままの沼津港が本来の姿だと思う。

(林)

- ・ 最近、沼津港らしくない大きな要因は魚がとれないことである。昔は魚屋（漁師、仲買等）に元気があり、それが沼津港の元気でもあった。今はどれぐらい取れるのか。

(沼津市)

- ・ 約2万トンであり、他港の傾向と同様例年減少傾向にある。

(林)

- ・ 市場が元気なのが港という感じがある。朝早くからセリを見られるのも魅力である。

(大村)

- ・ 外国人観光客の動向はどうか。

(難波)

- ・ 県内に来る外国人は高い料金を払って高質な空間を求める方が多い。しかし伊豆の観光の現状からはそのようなことばかりも言えない状況で、質を下げてでも低価格でたくさ

んの客を受け入れることも必要。静岡空港から静岡の観光のためだけに台湾の観光客用のツアーが企画されている。県全体としては高質を求める観光客を増やしたい。

(竹内)

- ・ 夕日と富士山の組み合わせも沼津だけでしか見られないわけではない。外国人受けする景観の組み合わせが何なのかを考える必要がある。海外では松と富士山の組み合わせはあまりピンと来ないのかもしれない。

(林)

- ・ 夕日の沈む中でのピンク色の富士山が感動する。売り方だと思う。沼津の人から沼津らしさを発信していく必要がある。

(大村)

- ・ 「びゅうお」から見る富士山も素晴らしい。

(林)

- ・ 私はやはり海拔 0mからの富士山が格別だと思う。

(大村)

- ・ 日本平から見る駿河湾や千本松原、富士山は本当に素晴らしい。

(林)

- ・ 戸田へ船で行く途中に見る富士山も魅力的である。

(大村)

- ・ オンリー沼津がどういうものなのかを固め、いかにマーケティングをするかが重要。

④今後の予定について

- ・ 「沼津港の将来を考える有識者会議（説明資料）」P.33を説明（事務局）

(事務局)

- ・ 今日のご意見をまとめさせていただき、もう少し具体化したものを事務局で作り、委員の方々に周知させていただく。

7. 閉会